

俳句創作における「表現の内的基準」の形成

Forming “Their Own Internal Criteria” in HAIKU-Creation

千田彩花*¹ 木村健一*¹
Ayaka Chida Kennichi Kimura

*¹ 公立はこだて未来大学大学院システム情報科学研究科
Graduate School of Systems Information Science, Future University Hakodate

This study investigated a creative activity of a *haiku* artist in the long-term. We focused on the relationship of an artist and an appreciator. As a result, it was suggested that a reaction from an appreciator strongly affected a creative activity.

1. はじめに

絵画、彫刻、音楽、散文詩、音楽。私たちの周囲には多くの芸術作品が存在している。その中の一つである俳句は、日本で生まれた世界で最も短い定型詩である。現在では俳句を通して文化交流が盛んに行われており、その人気は「俳句をユネスコの無形文化遺産に」との声があがるほどだ[宇佐美, 2015]。

芸術作品を生み出す創造的活動は、未だ明らかにされていない人間の知的行為の一つである。現在創造的活動に関しては、作家の心理変化といった「内的要因」と、鑑賞者などからによる「外的要因」という2つの側面から研究がされている。本研究では、俳句制作の熟達を目指す人物の観察を通してこれらの2つの要因の相関関係を示し、質の高い表現行為を促す要因を検討する。

2. 関連研究

2.1 現代芸術家の創造的熟達の過程

横地と岡田は、活動年数の異なる4人の現代芸術家たちへのインタビュー調査を行った[横地, 岡田 2007]。その結果、現代芸術家たちの熟達の過程には3つのフェーズが存在していることが示された。

本研究ではこの3つのフェーズのうち、芸術家たちが自立して自身の表現方法やスタイルを確立していくのに最も重要と考えられる「内的基準の形成」に注目する。

(1) 外的基準へのとらわれ

制作活動を始めてから芸術家たちに1度目の変化が起きるまでの間、彼らの作品制作には明確なテーマが設けられていない。表現方法は学校などで教えられるアカデミックな方法をとることが多く、他者の表現方法や価値観などといった外的基準を意識して作品制作をしている。

(2) 内的基準の形成

外的基準による制作に行き詰ると、彼らの活動に変化が生じる。それまで試行してきた「既存の価値観や表現方法」による制作ではなく、「作家個人に一番よく馴染む表現」というものを探索・再考し始める。その中で彼らは、表現行為をする意味などをしきりに考え、作家自身を基準にした制作を行っていた。

(3) 創作ビジョンの明確化

ある程度表現方法やスタイルを追求すると、彼らは新しいシリーズ作品や表現方法を試行し始める。さらにこの時期は、作品

制作における中核となるものである「創作ビジョン」を強く意識していた。

2.2 Implication of a System Perspective for Study of Creativity

作品を世間に発表するという行為には、必ず鑑賞者の存在がある。作家は常日頃他者からの評価を受けながら作品制作をしており、創造性が個々の内省のみで熟達するとは考え難い。

チクセントミハイは創造性を独立したものではなく、「領域 (domain)」「個人 (person)」「社会 (field)」の3つの要素から捉えようとし、「創造性のシステムモデル (a dynamic model of the creative process)」(図1)を提唱した[Csikszentmihalyi, 1998]。作家たちは自分が活動する領域の中に蓄積された情報から学び、作品を制作する。そして完成した作品の価値を判断し、良しとしたものをその領域の中に蓄積する役割を担っているのが「社会 (field)」である。本研究では、この「社会 (field)」にあたる部分をさらに的を絞って「鑑賞者」と置き換えた。

今回は、この創造性のシステムモデルを採用して調査を行った。表現行為は1年や2年で熟達するものではなく、数回の単発的な調査で熟達過程を捉えることは極めて難しい。したがって本研究では、作品制作を始めてから8年目の作家を対象とした。作品制作を始めた当初の振り返りに加えて、現在進行形で行われている活動を観察することで、鑑賞者が作家の表現行為に与える影響を捉える。

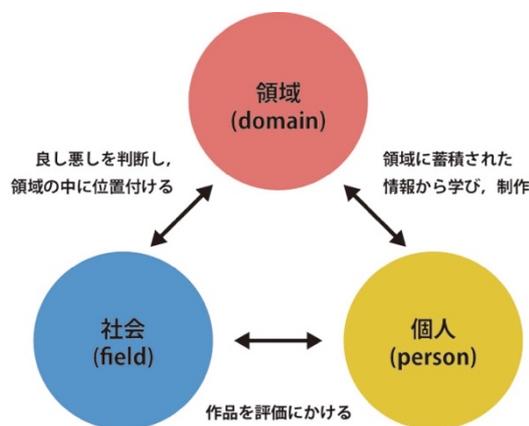


図1 創造性のシステムモデル

連絡先: 千田彩花, 公立はこだて未来大学大学院 システム情報科学研究科, 〒041-0803 北海道函館市亀田中野町 116-2, g2214001@fun.ac.jp

表1 Tumblr スタッフによるメールインタビュー内容とその回答*1

質問	回答
俳句で表現しようとしていることはどんなことか	①自分の目に見える世界を俳句を通して「世界とはこうあるものだ」と断定させたいと思っている。
俳句のルールと、自由に表現したいという創造性の折り合いはどのようにつけているのか	②俳句を始めた当初はルールに苦しむことはなかったが、続けるうちに「17音じゃ足りない」と苦しみ始めた。あるときは「これは俳句じゃないなんて」言われたこともあった。しかし、種田山頭火ゆかりのコンテストで特選をもたらした作品を③同好会の顧問に褒められて、「あ、これでいいんだ」って感じがした。賞をもたらしたことよりも顧問に褒められたことが何よりも嬉しかった。それまでは④自分の表現したいことよりも、いかに575におさめられるかということばかり考えていた。
俳句の面白さ、また難しさとはどんなところか	難しさはそのうち面白さに変わる。言いたいことを言えないまま浮かんできそうな言葉を逃すことがよくある。(中略)しばらくして⑤西東三鬼の句集を読んでいたら「水枕ガバリと寒い海がある」という句を見つけ、「これだったのか!」と感動した。「私が言いたいことはこれだったんだよ!」と。自分の表現したいことを俳句として表すのはやはり難しいが、言いたいことを言えないモヤモヤを誰かが発信してくれていて、さらにそれに打ち付けられたような共感があると、「やっぱり俳句は面白い」と思える。
俳句の新しい可能性を探って、他ジャンルのクリエイターと関わって活動をしているとのことだが、どういった方向の可能性を探っているのか	⑥俳句を書いている人々には、作品を鑑賞者に見せるためのレイアウト力が足りない。他ジャンルでは作品の見せ方についてすごく考えられている。他ジャンルのクリエイターと関わることで、俳句創作をしている人々の作品をもっと多くの外の人に見せるための方法を探っていきたい。

3. 方法

(1) 研究手法

今回はオートエスノグラフィー法を用いて、作品制作を行う当事者のみが獲得する知識や語りから、作家の表現行為の熟達過程を捉える。

(2) 被験者

本研究では、俳句創作を始めてから8年目の筆者自身を調査対象とする。作家のプロフィールを以下に示す。

- 2008年 俳句創作開始
- 2009年 第11回松山俳句甲子園全国大会出場
- 2009年 第18回全国山頭火フォーラム 山頭火俳句大会 村上護*2 特選受賞
- 2010年 第12回神奈川大学全国高校生俳句大賞 最優秀賞受賞
- 2012年 高野ムツオ*3 主宰俳句結社*4「小熊座」への投句開始
- 2014年 SNS サイト Tumblr*5 にて作品発表を開始
- 2016年 「小熊座」同人*6 への推薦

4. 作家と鑑賞者の関わり

4.1 外的基準へのとらわれ

作家は俳句創作を始めてから8年目に、作品発表の場として利用している SNS サイト Tumblr のスタッフから俳句創作に関するインタビュー依頼を受けている(表1)。そのインタビューの回答から、作家が外的基準にとらわれていた様子が見られた。

制作を始めた当初は自分の創造性を磨いて発揮することよりも、俳句を作る上での基礎的な知識を学んでいた時期であった。そのため、創作に対する葛藤がほぼない状態である。しかし他者の作品に触れながら俳句の知識を獲得するにつれ、俳句の575のリズム、いわゆる外的基準を窮屈だと感じていたことが窺える(表1下線部②④)。

それでは作家が外的基準への解放を目指し、自分独自の表現を手に入れようと腰をあげたきっかけは何だったのか。次にあげる2句は、俳句創作を始めた当初に書いた作品(A)と、山頭火俳句大会で受賞した作品(B)である。

- A 薫風や読まずじまいの本を閉じ (2009年5月作)
 B 天の川静脈の中を流れる (2009年8月作)

Aは俳句に馴染みがない鑑賞者でも一目で俳句だとわかる作りになっている。切れ字の「や」を使うことで読み上げる際にリズムがとりやすいように仕上げており、575の型にきっちりとはまっている。さらにBと比べて具象的であり、情景を思い浮かべることが比較的容易である。一方、BはAとは真逆の作りになっている。575のリズムは崩しているし、何よりAと比べて抽象度が高いBに関して作家は、「同好会の顧問に褒められて「あ、これでいいんだ」って感じがした」とインタビューで語っている(表1下線部③)。このことから、作家はBを制作する以前は、「575のリズム」「情景の思い浮かべやすさ」という2つの外的基準にとらわれていたと考えられる。

さらに作家は、敬愛する指導者にBの作品を褒められたこと、自由律俳句で有名な種田山頭火ゆかりのコンテストで受賞したことをきっかけに、抽象度が高い作品や、リズムを崩した破調の句を多く制作するようになる。

*1 Tumblr ユーザーボイス: 北海道在住チ田一日さん(24歳). (2015, Mar. 23) [Tumblr post]. Retrieved from http://nihongo.tumblr.com/post/141539575617/tumblr_ユーザーボイス-北海道在住チ田一日-ちだのぼる-さん-24歳

*2 文芸評論家, 俳人

*3 俳人, 読売文学賞・小野詩歌文学賞・蛇笏賞受賞者, 角川俳句賞選考員

*4 ある理念のもとに主宰を置き, 俳句雑誌を出版することを目的として集まった作家集団

*5 創始者 David Karp. クリエイター向け SNS サイト.

*6 共同体のメンバーとして認められた人物。俳句結社において同人は、結社が発行する俳句雑誌への作品制作から始まり、雑誌の編集や記事の作成などを行う。

表 2 俳句結社における作品評価

作品	句評
ふらここや世界の終わりは日曜日 (2013年5月作)	作者は、天地開闢の原初の渚に立ち、時の「ふらここ」の揺れを見守っているかのようです。キリスト教なら神が天地を創造した後の休息日が日曜日であるのは当然ですが、作者が見ているのは、神が創造したこの「世界の終わり」の日です。この句が聖書という宗教的な世界観すら突き破り、時の持つ普遍的な世界を獲得しているのは、なんと日本的な「ふらここ」という古風な季語の力だと言えるでしょう。物質の時は止まっても、心の中の「ふらここ」は決して止まらない気がします。 主宰 高野ムツオ(「小熊座」6月号より)
蟻塚を跨いで帰れ故郷は(2013年7月作)	私たちは独創的な言語感覚の持ち主の登場に立ち会っているのかもしれない。6月号で「ふらここや世界の終わりは日曜日」と、天地開闢の原初の渚に立ち「世界の終わり」の時の揺れを体現していた作者は、今度は「蟻塚を跨いで帰れ」という「故郷」を出現させます。「蟻塚」という蟻たちの巣穴を守る水害防衛堤防の語感から、何か困難を伴う帰郷の様か、「故郷」自身の存在の困難さが立ち現われ、自分自身に向けた命令形によって檄を飛ばしています。 同人 武良竜彦(「小熊座」9月号より)

4.2 鑑賞者の不在

高校を卒業すると同時に、作家は俳句同好会を退部。制作した作品を発表する機会と場を失う。すると作品の制作量が極端に減り、完成した作品も発表しないまま捨ててしまっていた。その時期の作品は残っていないため、作品制作の傾向などをすることはできない。しかし作品を捨ててしまっているという事実から、作家が俳句創作に関して前向きではなかったことが窺える。

一方、作品制作が滞る中でも熱心に行っていたことがある。それは、他者の作品の鑑賞である。先人たちや現代俳人たちの作品に触れることで、自分が俳句を書くことの意味について再考していた(表1下線部⑤)。この様子から、俳句同好会を退部してから約2年の期間に「内的基準の形成」が始まったと推測する。またこの時期は作家の周囲に鑑賞者がいなかったため、作品に反映させた内的基準の良し悪しを判断できない状態であった。作品制作が滞ったのは、鑑賞者が不在であったことが大きな要因となっていたと考えられる。

4.3 鑑賞者の獲得と内的基準の形成

4.3.1 俳句結社への投句開始

作家が自分の表現スタイルを試すために始めたのが、俳句結社「小熊座」への投句である。そこで取り上げられた作品の評価から、作家が独自の表現スタイルを獲得していた可能性が窺える(表2下線部)。

それでは結社への投句を始めた作家が、その後独自の表現スタイルを自在に操りながら質の高い作品を制作できていたのだろうか。表2に記した句評を受けて間もなくして、結社から作家の元に作品20句の原稿依頼が届いた。作家は後にその時の原稿を読みながら「手癖で描いた句が多いし、なんでこの句が取り上げられたんだろう」「自信作に対しての反応がない」と語っており、自己評価と他者からのリアクションとのギャップに困惑している様子であった。

4.3.2 作品発表の場としての SNS

結社への投句を通して、作品に対する自己評価と他者からのリアクションにギャップを感じた作家は、「自分の作品の何がダメなのか」ということをしきりに考えるようになる。そこで作家は、結社の外の人々から作品を評価してもらうために、SNSを利用して作品の発表を始める。

SNS を利用し始めてから半年ほどは他者からのリアクションが希薄であったが、後に SNS を通して作家の元へ作品の感想が届くようになる。

「**ち田さんの俳句めっちゃめっちゃかっこいい**」^{*1}

「(前略)素敵な俳句を拝見して、作字のデザインもととききました。それで、この先の活動の情報がほしいと思い、フォローさせていただきます(以下略)」^{*2}

この時期の作家は、抽象度の高い作品を制作することを試行していた。作品に対して良いリアクションが届くようになると、以下のような作品を多く制作するようになる。

- C 角部屋に向日葵は咲かないシナリオ (2015年7月11日作)
- D 8月が鏡の上を通り過ぐ (2009年8月)
- E 鶏頭やセリヌンティウスは恋をしない (2015年9月)

さらに、作家は作品を評価される中で「自分は断定の句を書くのが得意だ」と発言しており、後にインタビューでもそのことに関して言及している(表1下線部①)。このことから、作家に一つの内的基準が形成されたことが窺える。

「この句評で思い出したんだけど、もともと私は断定の句を書くのが得意だったんだよ。」^{*3}

また作家に届くようになったのは作品の評価だけではない。作家の SNS における作品の提示の仕方についても言及されている。以下のような評価をされたことで、作家は「作品提示の仕方」の重要性について考えるようになる(表1下線部⑥)。

*1 matsugemoyasu. (2015, Jun. 18) ち田さんの俳句めっちゃめっちゃかっこいい [Twitter post]. Retrieved from <http://id.fnshr.info/2012/03/11/citingtweet/>

*2 kxxxxme. (2015, Jun. 18) こんにちは、ち田さま。はじめまして。リツイートで回ってきた素敵な俳句を拝見して、作字のデザインもととききました。それで、この先のご活動の情報がほしい、と思い、フォローさせていただきます。まさか、リフォローいただけるとはつゆとも思わず、驚いております。 [Twitter post]. Retrieved from <https://twitter.com/kxxxxme/status/611414281586737153>

*3 daaaaamegane. (2016, Jan. 18) この句評で思い出したけど、もともと私は断定の句を書くのが得意だったんだよ。「間違いは吾が箱庭のなかにある」「ふらここや世界の終わりは日曜日」とか気に入ってる。もっと断定させたい。 [Twitter post]. <https://twitter.com/daaaaamegane/status/688975215112540161>

「密かに Tumblr 俳壇なるものが存在していると勝手に思っている。(中略)まずはチ田さん. 密かにリスペクトしているタンブラ俳人. ある意味 Tumblr における俳句発表の完成形を提示した方.(以下略)」*1

抽象度の高い作品, 作品提示の仕方に対する強い考え, いずれも鑑賞者からのリアクションが起因していたことが窺える.

4.3.3 グラフィックデザイナーとの共作

作品制作を続ける中作家は, 「表現をするなら別に俳句じゃなくてもいいのではないか」と考え, 新しい表現方法を探求するために短歌の制作を始めた.

F チロルチョコあげるから聞け恋人よ「世界は終わる、確信的に」(2015年12月29日)

G チョコレートいらないから聞け恋人よ「あれが火星、第二の地球」(2015年12月29日)

すると, 作家のもとにある連絡が届いた. FとGの作品をグラフィックで表現したいから短歌を提供してもらえないか, というグラフィックデザイナーからの依頼である. この依頼をきっかけに, 作家はグラフィックデザイナーとシリーズ作品の制作を始めた.

作家は以前にも短歌の制作を経験しているが, 継続的な制作には至らなかった. しかしこの呼びかけをきっかけに作家は定期的に短歌の制作を行っており, 俳句というジャンルを越えた表現方法の探索に本腰を入れている. これまでの「カッコいい」「好きです」といったようなリアクションではなく, 「共作の誘い」という鑑賞者からの密度の高いリアクションが, 新しい表現方法探索へのトリガーになったと考えられる.

5. まとめ

本研究では, 作家の心理的変化といった「内的要因」と鑑賞者からのリアクションによる「外的要因」の2点に注目し, 質の高い表現行為を促す要因について検討した. 具象的な作品から抽象的な作品制作への移行, 作品提示へのこだわり, 短歌制作による新しい表現方法の探求. 作品制作に対するこれらの作家のポリシーの源泉は, いずれも鑑賞者からのリアクションが作品制作に強く影響することが示唆された.

参考文献

- [宇佐美 2015] 宇佐美貴子: 近景遠景, 朝日新聞, 2015年7月28日付朝刊.
- [横地, 岡田 2007] 横地早和子, 岡田猛: 現代芸術家の創造的熟達の過程, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcss/14/3/14_3_437/_pdf, 2007. (2016年3月27日最終閲覧)
- [Csikszentmihalyi, 1998] M. Csikszentmihalyi, R.J. Sternberg (Ed): Implications of a System Perspective for the Study of Creativity, Hand book of creativity, Cambridge University Press, 1998.

*1 kumatagari. (2015, Sep. 14) [Hatena Blog post]. Retrieved from <http://kumatagari.hateblo.jp/entry/2015/09/14/183550>